

「新・方法」講義立会記

匿名希望

2010年に発表された「新・方法主義第一宣言」より、3人編成で2013年現在まで続いている創作グループ「新・方法」。本レポートでは、講義において私なりに感じた「新・方法」による芸術について記述する。

「新・方法」の誕生から現在にいたるまでの経緯や、これまでに彼らが発表してきた作品を授業内でいくつか拝見した。芸術を嗜む習慣のない一般人が芸術に触れる機会は決して多くはないと思うが、そんな人々に「新・方法」の創る作品とはどんなものかを説明する際に最も伝わりやすいであろう言葉として、私は「意味不明」という言葉を挙げたい。こう言うとネガティブなイメージを与えてしまうとは思いますが、ネガティブな意味合いであろうとポジティブな意味合いであろうと、とにかく「意味不明」という言葉が似合う創作スタイルだ。

一般的に「芸術」というと、たとえばゴッホの絵画であるとか、ミケランジェロの彫刻であるとか、そういったものをイメージする人が大多数であると思う。それに抱くイメージには「美しい」というものが多いだろう。「芸術＝美しい」という図式は一般的に成り立つ。その作品の優劣を語る際に、最もポピュラーな物差しが「美しさ」だ。

しかし、「新・方法」によって創られるモノ（「物」ではない）にはその認識が通用しない。「削除済」という名前以外には何も存在しないWebページであったり、「新・方法」のメンバーが3人で水の沸点を調べる実験をする様子を撮影した写真であったり、1週間連続で「今日は●曜日である」というメールを送信するという試みであったり…。どれもが一般的な「芸術」からはかけ離れていると言わざるを得ないものばかりで、「美しさ」とは無縁のものだ。

率直に述べれば、その作品に触れる際、「一体これのどこが芸術なのだろう」と疑問を感じてしまうことがほとんどだ。おそらく私のように「芸術」を解釈している人にはこの感覚を共有していただけたらと思う。当然のことながら、他の形式によって表現された作品と比較して優劣を付けることなどできないし、「新・方法」の作品それぞれにもそれはできない。そういった物差しなど存在しない芸術の表現方法が「新・方法」なのだ。

「新・方法」に触れることによって、「芸術」の解釈は確実に広まる。未体験の「芸術」に触れることで、何かしらの新しい刺激を受けることができるのは間違いない。少なくとも私は、「なんだこりゃ」という印象を抱くと同時に「いろんなことができるものだ」と感心もした。従来形式に囚われない発想の柔軟性は当然として、どの作品にも遊び心が存分に盛り込まれており、創作することの楽しみは確かに感じることができる。特に何かを創作することを職業や趣味とする人にとっては、触れることに大きな意味を見出させるのではないだろうか。

しかし、先述の通り、作品を鑑賞する側からしてみればほとんどの作品が「意味不明」だ。それぞれの作品をどう解釈すればよいのかということを講義でもっとたくさん拝聴したかったと思う。